慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	独逸ハンザに関する近著三種
Sub Title	
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.6 (1941. 6) ,p.787(89)- 794(96)
JaLC DOI	10.14991/001.19410601-0089
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410601-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

百八十七年の著 The First Nine Years of the Bank of England. An enquiry into a weekly record of the price of bank stock from August 17, 1694 to September 17, 1703. に於いて「一再ならず本書を引用し、是れを以つて、「極めて稀覯にして且つ貴重なる著作」となし、彼れは之れを牛津大學のボードレー圖書館（the Bodleian Library）に於いて參讀することを得たる旨を述べ、同圖書館所藏本は大英博物館には其の一本も存せざる旨を附記してゐる。（pp. 30, 37.）。私は偶々此の有名なる牛津經濟學者の書を讀んで、彼れが特に再度まで an exceedingly rare and valuable work. とか excessively rare, but it is in Bodley. とか記しつゝある珍籍が、久しゝ以前から私の貧しき書架の一隅に所藏せられ居ることを奇とし、本書が果してロヂャースの言ふが如く、稀世の珍書なりや否やを訝るものである。ジャスチスは、本書の外、一千七百〇五年に A General Treatise of the Dominion and Laws of the Sea, ancient and modern (especially French and English), together with a proposal to abolish Pressing for the Navy. を公にしてゐると云ふことである。

獨逸ハンザに關する近著三種

高村象平

Georg Fink, Die Hanse. (Leipzig. 1939.)
Fritz Rörig, Vom Werden und Wesen der Hanse. (Leipzig. 1940.)
Claus Nordmann, Oberdeutschland und die deutsche Hanse. (Weimar. 1939.)

一

獨逸ハンザについての概說書は、このところ暫らく刊行されなかつた。今世紀になつてから出版され、そして信賴して參照し得るものとしては、Dietrich Schäfer, Die Hanse. (Bielefeld u. Leipzig. 1903.)と、Walther Vogel, Kurze Geschichte der Deutschen Hanse. (München u. Leipzig. 1915.)との二つを數へ得るのみである。前者はイク氏編纂の Monographien zur Weltgeschichte. の第十九冊として、後者は Pfingstblätter des Hansischen Geschichtsvereins. の第十一冊として公刊されたものであつた。兩者共に脚註を缺くが、シェエファ教授の著書は、挿入された多くの圖版によつて讀者の理解を助けるところ多く、フォオゲル教授のそれはその表題の示す如く、簡潔にしてしかも要を盡してゐる點において特色がある。

傳ふるところによれば、獨逸ハンザ文書集や議事錄集の編纂にたづさはり、ハンザに關する幾多のすぐれた論文を發表し、且つその未完の遺稿 Handels-und Verkehrsgeschichte der Deutschen Kaiserzeit. (Berlin. 1922.) を以て知られる碩學ワルタヶ・シタイン教授は、その生前獨逸ハンザ通史を執筆する計畫を有されたといふ。一九二〇年五十六歲を以て逝かれるまでに發表された諸勞作から推して、若しその計畫が實現したならば、それは必らずや精緻を極めたものとなつたことであつたらう。教授の學風は、些細な事實もゆるがせにしないで周到な文獻的檢討を加へる點に特色を有したのであつた。のみならずその觀察、例へば獨逸の古き商人仲間において、仲間全體を顧慮することにより個人の經濟行爲を制限したと夙に指摘されてゐたことの如き(Stein, HGbll. 1910. S. 587 f.)、最近の研究成果(z. B.: Hans Planitz, Kaufmannsgilde. ZSRG. 60. GA. 1940.)と照合して、その達識は高く評價されねばならないものがある。然しながら、教授のハンザ通史は遂に上梓されることなく終つたのである。

扨てこゝに紹介するゲェオルク・フィンク氏の「ハンザ」は久し振りに刊行された概說書である。氏は現在リュベック文書館司書、兼ねてハンザ史學會やリュベック史學會の主腦者の一人である。この書は Meyers Bunte Bändchen. なる叢書の第四十三冊で、本文三十三頁、圖版十六頁の小著であるが、この僅少な紙幅の裡に、獨逸ハンザの全貌を巧みに再現してゐる。ヴィキングの都市ハイタブゥ、第十世紀建設のシュレスウィッヒに筆を起し、バルト海地域における商業興隆と東北獨逸植民運動との密接な連繫、西歐、特に倫敦、ブルゥヂュにおける商人ハンザの形成、これ等外地ハンザの本國都市ハンザへの轉化、以下同盟の對內・對外關係、その繁榮期と衰退期とにおける狀態等々、簡明に記述されてゐる。

そのうちでフィンク氏が特に强調されてゐる箇所二三を擧げるならば、獨逸商人が一般に北歐諸國で土着人口と同一の、又はこれに優つた地位を獲得したのは、そのすぐれた組織に負ふこと、中世獨逸市民階級の有せる仲間意識はハンザ史の裡から最も容易に、しかも判然ととれを把へ得ること、それは指導と服屬との關係の下に全體の繁榮に奉仕する謂はゞ互惠的思想であつて、この仲間精神が都市生活の全部(商業・手工業・宗教等)を貫ぬいてゐたこと、ハンザ都市における宗教改革は市政上の民主運動と關聯して現はれ、後者は同盟沒落に導くものであつたこと、北方諸國の政治的經濟的躍進は、それ等諸地におけるハンザの優越が機緣となつて惹き起されたものであり、しかもこの發展をハンザは阻止し得なかつたこと、獨逸人が他の民族よりも政治的能力少しとの批判は、ハンザの業績を知る者にとつて作り話に外ならないこと、諸都市の主腦者や一般市民は何等外交的訓練を受けることなくして、諸外國の國民主義的行動に匹敵する大きな仕事をなしとげたこと等である。

この小著の全體を通じて受ける感觸は、謂ゆるレェリッヒ學派のそれである。レェリッヒ學派の特徵については「社會經濟史學」本年三月號に述べたところであるから、こゝには繰り返へさない。レェリッヒ學派の主張は、同時に現下の獨逸史學界の主潮に即應するものでもある。從つてフィンク氏の小著は、現在の獨逸史學の氣息のかゝつたハンザ概說書であるといふべく、この意味において前記シェエファ、フォオゲル兩教授の概說書と相並んで一讀さるべき價値を持つと考へられる。最後に、本書に挿入された美麗な着色圖版の中で、ハムブルク港圖、ベルゲン港圖、ロシトック市場圖等は、興味深いものであることを附言しよう。

二

シェエファ、シタイン、フォオゲル諸教授亡き後、獨逸ハンザ史研究の分野において指導的地位を占めるフリッツ・レェリッヒ教授は、今般新たに加筆した四つの論文を集めて「ハンザの發達と本質」と題する一書を公刊された。

その四論文とは、(一) Die Gestaltung des Ostseeraums. (Deutsches Archiv für Landes-und Volksforschung. Jg. 2. 1938/39.)、(二) Die Schlacht bei Bornhöved. (Zeitschrift des Vereins für Lübeckische Geschichte und Altertumskunde. Bd. 24. 1927.)、(三) Unternehmerkräfte im flandrisch-hansischen Raum. (Historische Zeitschrift. Bd. 159. 1939.)、(四) Hinrich Castorp, Bürgermeister von Lübeck. (Gestalter deutscher Vergangenheit, hrsg. v. P. R. Rohden. Potsdam/Berlin. 1937.) である。

一般にレェリッヒ教授の研究方法には、前記シタイン教授のそれと對蹠的なものがあるといへる。即ちそれは、瑣末な事實の文獻的檢討よりも、獨逸ハンザについて教授の抱懷される根本見解を確立することに重點を置く方法である。その見解とは、ハンザの最初の組織形態を以て血の共通的結合の上につくられた經濟協同體であつたといふこと（HZ. Bd. 139. 1929. S. 246.）、從つて獨逸ハンザは中世史上にのこした大なる經濟的給付を以て特徴づけられるだけではなく、私經濟的活動の意味の經濟「以上のもの」を有した點にも留意せねばならぬといふことである。換言すれば獨逸ハンザの意義はこの「より以上のもの」の裡にあり、これがハンザ研究の中心とならねばならぬといふのである。端的にいへば、それは獨逸民族態、政治、軍備の諸要件であり、これ等が經濟と密接に絡み合ひ統合されて、以て獨逸ハンザの偉容を形成したと做すのである。といに紹介する教授の近著を構成する四論文は、かゝる「より以上のもの」をその多面性のうちに示さんとするもの、そして同時にハンザをその發達の過程に即して把握し得るやう配置されたものである。

第一の獨逸市民階級によるバルト海地域の開拓を取扱つた論文は、教授が HGbll. 1933. や Jomsburg. I/1. (1937.) 誌上に發表された所説、即ちハンザ經濟體制の構成とバルト海地域における都市建設乃至植民給付との關聯を一層明瞭に示されたものである。獨逸ハンザ史の端緒は獨逸植民者と敢爲な企劃者的商人との綜合にありとし、獨逸ハンザは優れた政治的指導を有せる經濟協同體なりとする。謂ゆる經濟と民族態（血）との結合、更に全體に對する政治的責任と私經濟的行動との結び付きの主張である。從つて「公益優先」は初期のハンザにおいて自明のことであつたと說く。

第二の論文は、丁抹勢力を北獨逸より驅逐し以て丁抹の「バルト海帝國」計畫を崩壞せしめた一二二七年のボルンヘェフェドの戰を主題とする。先づ第十三世紀最初の三十年の政治狀態を說き、右の一戰を同世紀における他の世界史的諸戰爭――シタウフェン家の地位を確立したブウヴィイヌの戰（一二一四年）、同家を終焉せしめたクリアコッツォの戰（一二六六年）、ハプスブルク家の地位を築いたデュルンクルト（マルヒフェルド）の戰（一二七八年）――と並置してその意義を述べる。ボルンヘェフェドの戰の成果は、北アルビンギェン地方を丁抹の支配から解放したこと、バルト海南部・東部における廣い植民地域が獨逸支配領域内に置かれたこと、この地域における獨逸人の經濟的擴張の指導者を與へたこと、即ちリュベック、そして後年の獨逸ハンザの指導的地位の基礎付けであつた。この戰による支配者交替、獨逸支配形成は、丁抹のそれと異り、植民といふ國民的要求をその背後に擁してをり、そしてバルト海上支配を目指し充武力的行爲と政治的勇氣とがこれを確立したのであつた。レェリッヒ教授の言によれば、かゝる史的過程は經濟に對する政治の優位を明らかに示すものに外ならない。

第三の論文は、ハンザ經濟精神とその推移を取扱ふ。成立初期の協同體的精神は、第十三世紀中葉における商業技術の變化に基づいて、飽くことなき個人的利益追求の精神に轉化する。この推移は、指導都市リュベックに最も明瞭に現はれた。舊來の上層市民の沒落。これに代つて Bernhard Mornewech の如き homines novi の擡頭と彼等

の市政掌握。然しながらリュベックにおいては、ドゥアイの Jean Boinebrike の如き頽廢的都市貴族による市政指導の形態には至らなかつた。それはハンザ都市の指導的商人が、單なる仲繼商人に終始することなく、北歐生產（毛織物・穀物・漁業等）の組織者であつたからである。この廣汎な地域に亙る積極的給付の故に、リュベックは局地的生產の組織に限られたフランドル都市と異つた展開を示したのであつた。（但しハンザ領域においても、ケルンやブラウンシュワイクの如く局地的毛織物生產が大なる役割を演じた都市は、フランドルに類似した對內的鬪爭を生んだ。）ところで前記モルネヴェッヒの經濟活動は、後年のヤコブ・フッガァのそれと似る。然しフッガァがアウグスブルクを單に彼の事業の本據としたのみであつたに對し、モルネヴェッヒは市政上の責任を負ひ、場合によつては自己の利益を犧牲に供することも惜しまなかつた。教授はこゝにハンザの初期とフッガァ時代のアヴグスブルクとの差異ありとし、第十三・四世紀のフランドル＝ハンザ地域の經濟給付を過少評價するシュトリィダァ教授一門に對して論駁を加へてゐる。

最後のリュベック市長カストルプについての論文は、ハンザの發達が一定の經濟的・政治的前提條件の下において自明的なものであると做す見解は誤謬であり、殊に第十五世紀後半以降の不利な內外政治情勢の中にあつて、加盟都市を糾合し、よくその勢威を次代にまで保持し得たのは、カストルプの如き代表的指導者が、商人として又、外交家として活動することを惜しまなかつたからであると說く。即ちカストルプの言行に藉りて、以てハンザの偉容の基礎に政治的指導力ありと主張するものである。

三

カストルプ時代のリュベックにとつて難關の一つとなつたものは、東西交易がニュルンベルク――ライプチッヒ――ポォゼンの陸路を採り、又はユットランド半島迂回の航路を採ること漸次頻繁となる趨勢であつた。この商業路線の變化を主題にとり、兼ねてハンザ經濟圈に對する南獨逸、特にニュルンベルク商人の進出を取扱つたものがクラウス・ノルドマン氏の「南獨逸と獨逸ハンザ」（ハンザ史學會の Pfingstblätter の第二十六冊）なる近著である。同氏はレェリッヒ教授門下、曩に Nürnberger Grosshändler im spätmittelalterlichen Lübeck.（Nürnberg. 1933.）の一書を公刊されてゐるが、新著はこれを最近の諸研究の成果を以て補充すると共に、他方その視野をリュベックからハンザ經濟圈一般に擴大し、且つ記述を概論風に改めたものである。

先づこゝに舊著の內容を顧みると、大要次の如くである。ニュルンベルクとリュベックとは第十四世紀前半以來交渉を持つたが、同世紀末にはニュルンベルクの大商人（ビルクハイマァ、グレェス、バウムガルトナァ等）がリュベックにおいて商品取引のみならず貨幣取引をも行つてゐる。然しこの銀行業務は間もなくリュベックの伊太利商人の掌握するところとなり、次いで、その小賣商業に對するリュベック雜貨商の抗告を機として、ニュルンベルク商人の商品に對し保護關稅政策が採られ、彼等の小賣商業禁止令が發せられた（一四五〇年）。爾來ニュルンベルク大商人にしてリュベックに定住する者（ムンタァ、ツゥツェンハイマァ、ロォデ、ムゥリッヒ、バァゲナウェル等）現はれ、彼等は一五三〇年頃まで盛に活躍をした。この他方、リュベック商人は第十五世紀中葉に至るまで對ニュルンベルク商業を積極的に行なつてゐたが、やがて同市から姿を消し、更に第十六世紀二、三十年には、商業路の推移によつてリュベックの商業的地位自體が舊來の重要性を失ふやうになつた。即ちニュルンベルク商人は西歐との取引をフランクフルト、アントワァプとの直接連絡により、他方東歐に對してはライプチッヒ經由の陸路を利用するに至つたのである。又フッガァ家の如き大會社も、グンチヒ乃至シテチン――アントワァプの徑路として、ズンド海

峡通航の北方航路をとつたのであつた。然しながら一世紀以上に亙つたニュルンベルクとリュベックとの密接な結合は、かゝる場合に至つても尚大なる意義を有したといはねばならない。何となれば、北獨商人と南獨商人との間に結ばれた緣故關係、會社關係に基づいて、南獨の文學や美術、更に宗教改革は、北獨に移入されたのであつたから。

ノルドマン氏が新著において說くところも、その要旨は以上と大同小異である。たゞ既に一言したやうに、この書における課題の範圍が擴大されてゐることに應じて、第十一、二世紀の南北獨逸商業の中心たるレェゲンスブルクとケルン、次いで第十二、三世紀の南北兩經濟圈の交會點としてのシャムパァニュ・メッセに筆を起し、以下第十五世紀中葉に至るまでの西歐におけるハンザ＝南獨關係、ハンザ中樞地域及びハンザ勢力下の東歐における南獨商人、第十六世紀三十年代に至るまでの西歐におけるハンザ＝南獨關係、ハンザ中核地帶における南獨商人、更に南獨商人のハンザ地域の回避等の諸章に分つて、ハンザ時代がフッガァ時代によつてとつて代られる經過を叙述する。

本書の特徵は、史的事實をその時間的系列に從ひ坦々たる筆致を以て記述した點にあらう。勿論諸處にはレェリッヒ教授の見解の繼承されたものが挾まれてゐる。然し前記レェリッヒ教授の新著、とりわけその第四論文の讀了後、ノルドマン氏の近著を繙くならば、同じく史籍と總括されるもの〻中に存する大きな相違を直ちに感得することが出來よう。一は解釋に、他は事實の記述に重點を置く。その孰れを採るべきかはこゝに論ずる限りではない。歷史研究の原資料に接すること困難な吾々にとつて、ノルドマン氏の近著は、その史的事實の網羅の故に甚だ有用である。

新版ジョン・グラント「死亡表に基く自然的及び政治的諸觀察」（一九三九年）

三邊清一郎

一

ジョン・グラントの「死亡表に基く自然的及び政治的諸觀察」Natural and political observations mentioned in a following index, and made upon the bills of mortality. By John Graunt, citizen of London. With reference to the government, religion, trade, growth, ayre, diseases, and the several changes of the said city. London, 1662. が、J・H・ホランダー教授編「經濟論文複製」A reprint of economic tracts の一冊として、カーネル大學統計學教授ウォルター・F・ウヰルコックスの解說を附して復刻された。グラントの「諸觀察」は統計學の先驅、記錄された數字を理論的に分析した最初の著述として有名である。

ジョン・グラントは一六二〇年四月二十四日倫敦に生れた。父はハムプシャー生れのひとであつたが、倫敦市民である。したがつて彼は倫敦兒である譯である。ウッドによれば、彼は少年の頃英吉利風の教育を受け、小間物商